



監督＝オリヴィエ・ダアン／製作＝アラン・ゴールドマン／脚本＝リュック・ベッソン／出演＝ジャン・レノ／ブノワ・マジメル／カミーユ・ナッタ／クリストファー・リー（アスマック・エース、ギャガ・ヒューマックス配給／2004年フランス映画／100分）

ジャン・レノ扮するニーマンス警視を主役とした、フランスの刑事モノ映画のパートⅡ。今回は、フランスのロレーヌ地方を舞台に、ヨハネの黙示録における『黙示録の天使たち』や、キリストの12人の使徒をめぐる猟奇殺人事件がターゲット。暗く陰惨な雰囲気ながら、展開はスピーディ。知的推理ゲームと犯人追跡アクションを両立させた、なかなかの好作品……。

🎬『クリムゾン・リバー』の世界

『クリムゾン・リバー』第1作は2000年のフランス映画で、2001年1月日本で公開されて大ヒットしたもの。主役は、フランス、パリ警察の特捜班に所属し、奇怪な事件を専門とするニーマンス警視。そしてこれを演ずるのは、フランスを代表する俳優、ジャン・レノ。

ハリウッド映画の刑事モノのように、やたら拳銃を振り回すことなく、知能の限りの推理を働かせていくというタイプのフランスの刑事モノは、かつての名優ジャン・ギャバンの流れを汲む伝統か……？

このニーマンス警視のキャラクターの面白さと、パートⅠの大ヒットに気をよくして、パートⅡの脚本を書いたのがフランスの巨匠リュック・ベッソン。ニーマンス警視の相棒も、物語の舞台も捜査のターゲットも、パートⅠとは何の関係もないが、次々と起こる奇怪な猟奇殺人事件と、これに対して緻密な推理力と分析力で立ち向かっていくニーマンス警視の姿は共通。そして、これぞ、まさにク

リムゾン・リバーの世界だ。

フランス映画の理解のために

フランス映画はプライドが高く、アメリカ、ハリウッドへの対抗心も強い。イラク戦争をめぐる国連内部でのフランスとアメリカの「対立」をみてもそれがよくわかる。また、最近公開された映画『ル・ディヴォース〜パリに恋して〜』を観れば、その対抗心がホンモノであることを再認識させられること請け合い。

また、フランスは、第1次、第2次世界大戦をドイツと戦い、2度とも大きな痛手を受けた。したがって、今でこそ、独仏連合 VS. アメリカ、あるいはEU連合 VS. アメリカという構図になっているものの、仏 VS. 独の対立構造は根強いものがある。ナチスの古傷に触れるテーマであればそれは当然だが、そうでなくてもエーリッヒ・M・レマルクの小説『西部戦線異状なし』で描かれたような第1次世界大戦の記憶に結びつく事柄においても同様のはずだ。

この映画の猟奇殺人事件の舞台は、フランス北東部に広がるロレーヌ地方にあるラボーデュー大修道院。そして、ドイツとの国境線に沿って築かれた、マジノ線と呼ばれる総延長300kmに及ぶ（もっとも、現実には70kmの2区間のみしか建設されなかったとのこと）大地下要塞が、この映画では大きな意味を持っている。

猟奇殺人事件から独仏戦争の記憶に連なる陰謀の黒幕として登場するのがドイツのヘメリッヒ大臣（クリストファー・リー）。このように、この映画の真のストーリーは、第1次、第2次世界大戦における独仏の戦いの歴史を勉強しなければ、なかなかわからないもの。

したがって、このフランス映画理解のためには、パンフレットの熟読と歴史のお勉強が不可欠だ……。

おどろおどろしい冒頭シーン

パートⅡの冒頭シーンは、雨の中のラボーデュー大修道院。暗く陰湿な雰囲気の中で、時々雷が鳴るのが不気味。そんな修道院のある部屋で、壁に打ちつけられていたイエス・キリストの像から突然血が流れ出した……。

その捜査に訪れたのがパリ警察のニーマンス警視。意外なのは、その科学的捜査法。犯罪の現場に最先端の分析機器を持ち込んで壁を透視すると、壁の中にはなんとイエス・キリストと同じように、磔にされた死体が……。いやはや、何とも、日本風に言えば、横溝正史風のおどろおどろしい世界からのスタートだ。

ヨハネの黙示録と12人の使徒

日本でも、2004年5月1日『パッション』が公開されたが、アメリカほど大反響を呼んでおらず、『世界の中心で、愛をさけぶ』や『ホーンテッド・マンション』、そして『トロイ』などに人気が集まっている様子。『パッション』は何ともショッキングな映画だったが、その理解のためにはイエス・キリストや、その歴史的背景についてかなりの勉強が必要。日本人はその基礎知識が不十分だから、どうしても「キリスト映画」はあまりヒットしないようだ。

この『クリムゾン・リバー』パートⅡの猟奇殺人の理解のためには、「ヨハネの黙示録」と「12人の使徒」の理解が不可欠。もっとも、あまり詳しくわからなくとも、12人の使徒が順番に殺人のターゲットになっていることはわかるので、深くつっこんで勉強するかどうかは、あなたの興味の持ち方次第だが……？

みごとな3人のチームワーク

今回のニーマンス警視の相棒は、ニーマンス警視の教え子のレダ（ブノワ・マジメル）。彼は知能優秀な刑事であるとともに、（薬によって）超人的なパワーを発揮する黒マント姿の「黙示録の天使たち」との追跡劇や格闘技も超一流。これだけ走れる刑事も珍しい……？

もう1人は途中から参加した美人刑事のマリー（カミーユ・ナッタ）。彼女は拳銃は持っているものの、神学を研究する専門家として警察に籍を置いている、学者のような存在。彼女のキリストや教会についての知識と分析力は、この事件の真相解明に不可欠で、非常に重要な役割を果たすことに……。

目まぐるしく、次々と起こる12人の使徒の殺人事件に対して、機敏に立ち向かえたのは、この3人のチームワークのおかげ。このすばらしい3人のチームワークは、何事においても見習わなければ……。

パートⅢの予感……。

私は2001年10月にホームページを開設した。そして、その中の趣味のページで、映画評論を書き始めたことがきっかけとなって、2002年6月に『SHOW-HEY シネマルーム』パートⅠを（自費）出版した。するとその後、その楽しさが次第に膨れ上がり、2003年8月『SHOW-HEY シネマルーム』パートⅡを、2004年4月『SHOW-HEY シネマルーム』パートⅢを出版することになり、映画鑑賞と映画評論書きは、私の弁護士生活のなかでも、次第にそのウエイトが大きくなっている。

また、愛媛大学法文学部での4日間の都市法政策の集中講義をまとめた『実況中継 まちづくりの法と政策』パートⅠ（2000年7月）に続いて、2002年9月には、『実況中継 まちづくりの法と政策』パートⅡを出版し、今年7月には、さらにパートⅢを出版することになっている。

このように、人間は誰でも、1つの目標を達成し、それが好評(?)だと、その続編をやりたくなるもの……。

この『クリムゾン・リバー』パートⅡの実現は、リュック・ベッソンが脚本を書いたことが大きな契機となったが、それ以上にジャン・レノは、このニーマンス警視の役をもっとやりたいと思っていたはず。そして、今回2匹目のドジョウをうまく射止めた彼は、きっと3匹目も狙っているはず……。

パンフレットによると、「いやいや、映画をゴムみたいに無理やり伸ばしてもいいことはないね(笑)」と笑うジャン・レノだが、「まんざらじゃない様子」とのこと。

数年後にはきっと、『クリムゾン・リバー』のパートⅢが実現していることだろう……。

2004(平成16)年5月31日記